

# 講演会から

## 演題

# 誰も孤立させない社会をめざして



講師 なかやま やそじ 中山 八十司さん

1940年生まれ、笛吹市出身。青山学院大文学部卒。山梨英和中学・高校の英語教員を32年間務めた。2010年から現職。

県生涯学習推進センターはこのほど、路上生活者と生活困窮者の支援について学ぶ講座を開き、NPO法人やまなしライフサポートの中山八十司理事長が「誰も孤立させない社会をめざして」と題し講演した。

### 「関係なく」

路上生活者の自立支援は簡単ではない。特に、つながりを求めることは難しく、訪問したり、食料を届けたりしても、多くは「関係ない」「来るな」と断られてしまう。印象深いのは、橋の下で暮らしていたある男性だ。しっかり

# 「つながり」探し復帰支援

## 食料提供、訪問活動で

した人で、廃材で立派な小屋も作っていた。10年ほど前、初めて訪問したときは「支援

て行ったが、通院は続かず、ある夏の日、橋のそばで亡くなっていった。その後、長野の

危機リーマンショックで、路上生活者が急増したことをきっかけに活動が始まった。コ

親族が見つかり、京都の三味線工房で職人をしていたことが分かった。「人の世話になりたくない」という頑固な人だったので、誰にも見つけてほしくなかったのかもしれない。

### 活動の原点

路上生活者や生活困窮者の多くは、さまざまな「つながり」から断絶されている。家庭は崩壊し、地域社会や、国の福祉とのつながりも切れていく状態だ。彼らとつながる糸口を探し、誰も孤立しない社会を築くことが、私たちの活動の原点である。

「やまなしライフサポート」は2008年、世界的な金融

口ナ禍で食材の提供に切り替わったが、それまで10年以上、毎週木曜日に甲府カトリック教会で、炊き出しを続けてきた。食料を提供するだけでなく、看護師による健康相談や社会福祉士による就労相談も行い、路上生活者らの居場所づくりの役割もある。

### 現在、支援の中心となって

いるのは、訪問活動だ。路上生活者や生活困窮者の様子を定期的に見に行き、必要があれば、無料や低額の診療事業を行う医療機関に同行したり、生活保護や年金など各種行政手続きの手伝いをしたりしている。また、2週間まで一時的に衣食住を無償提供する宿泊所のほか、軽食の提供やシャワー、洗濯機の使用ができる施設も用意している。こうした中でつながりを構築し、生活復帰支援を行っている。厚労省の全国調査によれば10年、路上生活者は全国で1万3124人。本県は橋の下や公園、JR甲府駅構内などで暮らす人たちが、目視の調査で36人いた。近年、その数は減り、20年は県内で2人となった。

### 若者が増加

路上生活者の特徴も変化している。15年までは60代後半から70代が中心で、廃品回収などで現金収入があり、近所のコンビニなどから余った弁当をもらうなど自活している人が多かった。しかし、16年ごろからは、30から50代の若い人が増加。ネットカフェなどで過ごしているうちに料金が払えなくなり、警察から私たちのところに連絡がくるケースが増えている。児童養護施設で育つなど小さい頃から苦労しているせいや、精神的な病を持っていても多く、就業しても長くは続かない。路上生活者も、健康で文化的な最低限度の生活を営むことは憲法25条で保障されている。「自己責任」で片付けず、困難に遭っている弱い立場の人を皆で守れる国でなければ、幸せな国ではない。そう痛切に感じている。